

大田仁史 編著

『地域リハビリテーション論』

池田 誠

(東京都立保健科学大学)

本書は「地域リハビリテーション学」の改訂版として、タイトルを「地域リハビリテーション論」に、また表紙のデザインや判型(A4)も一新させた。表紙は、表に上向きの矢が途中で折れ曲がった写真で、裏に水面から杭が上に突き出た写真である。このイメージは、地域リハビリテーションとは地域に根ざした活動で、そこに内在する問題を解決するための活動にあるとの編著者らの気持ちの表れと思う。そのために視点を上を見据えながらも常に水面下に潜む見えにくい問題に据えておかねば全体を理解することはできないとの主張ではないだろうか。

編者の大田仁史先生は、地域リハビリテーションとは障害によって引き起こされる制限や制約に対して新たな自己変革を迫られた障害者、その家族を社会の構成員の一員として「共生への変革のプロセス」とする。さらに、リハビリテーションを「地域に始まって地域で終わる」とし、地域が障害者をトータルに包み込めるかが地域リハビリテーションのエビデンスであると主張している。これは少なくとも 30 年の長い経験から導き出した結論でもあろう。

新著の内容は、第 I 章で法制度の流れに中で地域リハビリテーションの活動の位置づけを、第 II 章で地域

リハビリテーションの考え方と定義をコンパクトにまとめている。第 III 章で諸サービスとして全体的なリハビリテーションの流れ、通所や訪問などのサービス、各専門職の役割等をまとめている。第 IV 章で介護保険制度の概要とリハビリテーションとの関係を図を十分に引き、最新のデータを基に図表を多くしてわかりやすく簡潔に整理している。第 V 章でシステムづくりについて医療圏の概念導入によるサービス展開図や介護保険制度下の支援体制などを図示することで理解しやすい。第 VI 章で援助事例として 5 例取り上げている。

通読すると、地域リハビリテーションが法制度を先取りしつつ、活動というより活動として着実に成果を上げてきた経緯が理解できる。その意味で現在現場で業務携わっている者はもちろんこれから地域リハビリテーションを学ぶ理学療法士、作業療法士、医師、看護職、介護職等にとって地域リハビリテーション活動全体を理解しやすい教科書として最適の書である。

日本リハビリテーション病院・施設協会は、地域リハビリテーションを「活動」と定義したように、この領域を学問として成立させることが難しいと考えているのであろうか。前著の「生活障害や評価に係わる内容」が削除され、援助事例をイメージしやすかった写真説明が省略されたことは残念である。編著者への期待として、次の改訂ではエビデンスを積み重ね、再度「論」から「学」へ挑戦してほしい。同時に地域理学療法学の確立が急務であることを痛感している。

●B5 判 110 頁

定価 2,520 円

2004 年 三輪書店・刊